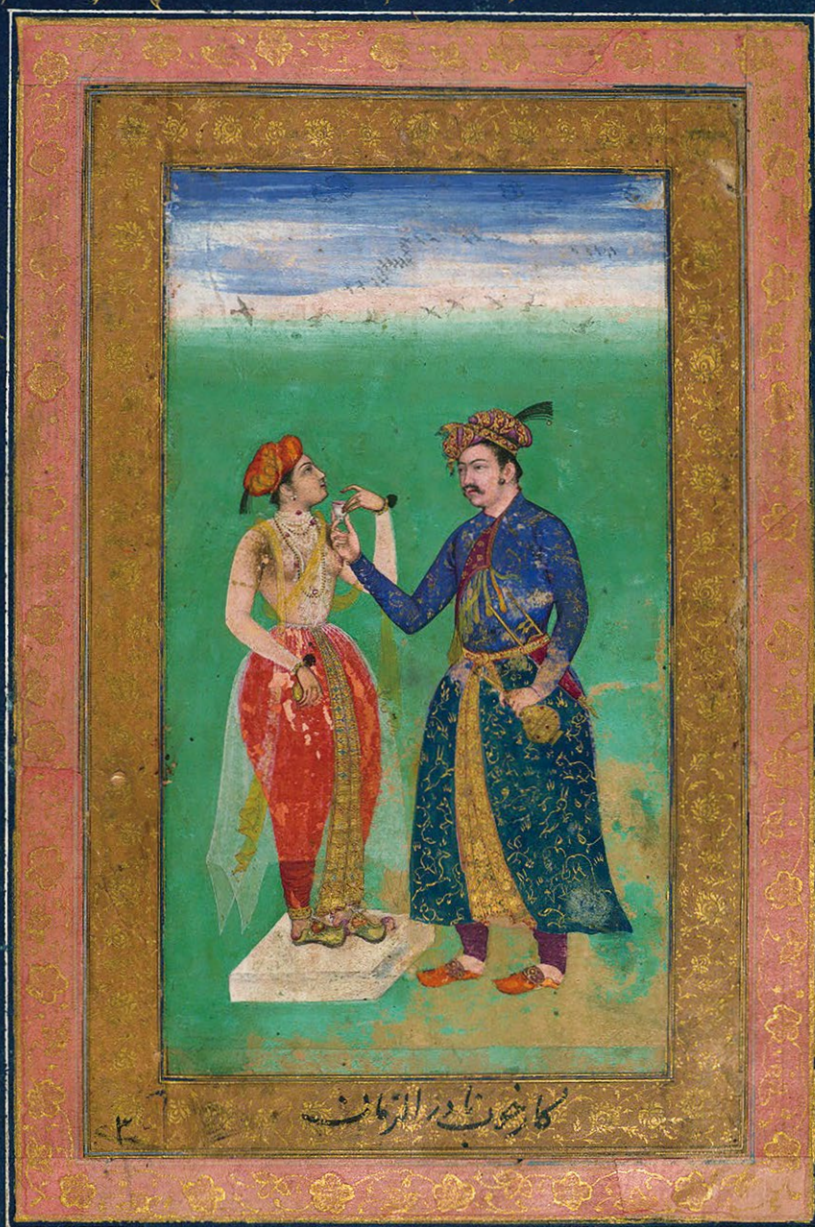


月刊 **みんぱく** 6月号

2025

特集

禁酒のイスラーム



巻頭エッセイ
素潜り句

視線とフェイスズ

1

臉を引き寄せて、まっすぐにしてみる。
そうすると見つからないでいた近過去の記憶なんかが甦ってくる。

細やかな編集により、家族の群的なものを構成していて、その受容が視線を誘導するそれぞれの惑星から見渡す、相互に。

口を結んで声を出す。

いわば進んで迎え入れられるなか、

歯の内側には余談。

ずっと退屈していた。

子は歩いていても無言。

だからわたしは音をうたう。

—伝わった？

未解決のまま生活はつづく。

すもぐ
しゅん
素潜り旬

詩人

プロフィール
1992年生まれ。大阪府在住。詩を書くことと身体性の伴う劇的なポエトリー・リーディングをほぼ同時にはじめる。著書に『バスタで巻いた靴』（港の人）。今夏、第二詩集刊行予定。

2

気がかり

なまな

見つめ

てください

頬を

さす

とまる

ボタン

4

いいえ

薄い雲は

目の前に

3

ひたすら遠くなる視座

かすかなる自ら黒髪が

慮る体躯の苦悩に散り

ばめられた五線譜と眸

それぞれの線の周縁で

波形を確認する不断の

そのうえで敷き詰めた

発光体は継接ぎだらけ

で机上の星々は丁寧に

描かれていくというの

にわたしの方から総て

手放してしまったのだ

5

—テクストから離れたくありません。
褪せ、部分的に細くなり沈黙する。

月刊
みんぱく
2025年 6月号

表紙

若い女性にワインを飲ませるムガル帝国第4代皇帝ジャハーンギールを描いたムガル絵画。アブ・アル＝ハサン作、17世紀前半
出典：The Walters Art Museum, W.668, f.40b

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ

視線とフェイスズ

素潜り旬

特集 禁酒のイスラーム

2 飲みたい 飲めない 飲みたくな

海野 典子

4 酒を詠むムスリム詩人

シェーク・タリク

6 酒はどこにあるのか

高尾 賢一郎

8 英雄叙事詩にあらわれる「酒」

坂井 弘紀

9 イランにおける「非合法的」愉しみ

小澤 一郎

10 イスタンブール、「酒飲む隣人」の置土産

宮下 遼

11 インドネシアの「おしゃれな」カフェバー

西川 慧

12 みんなく回覧板

14 推しコレ図鑑

いつでもどこでも「ワタプーショウ」

呉屋 淳子

16 追悼

菅瀬晶子准教授を偲ぶ

島村 一平

17 世界の「乗っちゃえ!」

失われた故郷へと運ぶバス

片 雪蘭

18 だって調査だもの

アームチェアー言語学者、萌ゆ

永井 正勝

20 ぼくっ!とフィルめし

甘い香りに包まれたチナプ

益田 喜和子

21 今月号の地図・編集後記



特集

禁酒のイスラーム

飲酒を禁じる戒律や法律の下でも
美酒の賛歌は口ずさまれ
酒に溺れた英雄の失敗談が興じられる。
それどころか、法の網をかいぐり
あの手この手で酒を求める人もいる。
人類にとって、酒とはいったい何なのか
突き付けられるのは、そんな問題？

1: 寧夏回族自治区銀川市にて、ヒツジの串焼きと回族の友人おすすめの赤ワイン(中国、2018年)
2: 日本国内のハラール中華料理店にて、北京回族が発案したといわれるウシ・ヒツジの臓物料理、すなわち爆肚(バオドゥー)(日本、2024年)
3: 首都タシュケントの街角にあるビールの量り売り店には、ロシア人やウズベク人が昼間から訪れる(ウズベキスタン、2019年)

人目を気にして

それでは、実際のところ、ムスリムは酒を飲むのか、飲まないのか？

ソ連解体後の中央アジア諸国ではイスラーム復興を目指す動きが活発化し、宗教的理由から飲酒を忌避する傾向が強まった。けれども、遊牧民のあいだでは、古くから馬やラクダのミルクを発酵させた乳酒が栄養源として飲用されてきた。ソ連時代に定着した蒸留酒ウォッカは、特に都市部では必ずといっていいほど宴席の中心に置かれている。とはいえ、人目を気にする人もいるようだ。出稼ぎ先の日本や韓国では「メツカから遠いから大丈夫」と冗談めかしながら飲酒する人が、自国では敬虔なムスリムからの批判を恐れてほとんど飲まないというケースも見受けられる。

中国にも約二六〇〇万人のムスリムが暮らしている。そのうち、外来ムスリムの末裔とされる回族の多くは酒を

域もある。アルコール度数の低い酒ならばいい、酩酊しなければいい、神聖なラマダーン月のあいだだけ禁酒すれば問題ない、などと言ってイスラーム法(シャリーア)を柔軟に解釈する人もいるのだ。

この詩に登場する預言者は、メッカ(現サウジアラビア)出身の商人でイスラーム開祖のムハンマドを指す。彼に下された神の啓示がまとめられた聖典クルアーン(コーラン)に基づき、その後飲酒が段階的に禁止行為(ハラーム)となっていた。当初は

私は泣いた。(中略)酒を飲むなと禁止命令が出たのだ。預言者が禁酒を命じたので、酒のために泣いたのだ。それでも私は酒を飲む、生のままで。背中を八〇回鞭打たれるのを知りながら。
(鳩治夫編訳『アラブ飲酒詩選』より抜粋、一部漢字を改変)

八〇回鞭打たれても

八世紀後半、アッバース朝統治下のアフワーズ(現イラン領)に生まれた詩人アブー・ヌワースは、酒や恋愛を題材とする数多くの享樂的な詩を残した。その一つ「酒の罰」には次のような節がある。

飲みたい 飲めない 飲みたくない

海野典子 大阪大学 講師

酒の益が部分的に認められていたものの、最終的に酒は理性を失わせる「悪魔の仕業」として製造・売買・摂取が禁止された。

ただし、実際に許容される酒の種類や飲酒量、酩酊の定義をめぐっては、学者や個人により見解が異なる。現在のトルコやマレーシアのように酒に比較的寛容な国・地



左: タシュケントの個人宅で提供されたブハラ産のブランデー(ウズベキスタン、2020年)
右: 日本国内のウイグル料理店にて、新疆ウイグル自治区の地ビール(日本、2024年)

飲まない。一部のハラール料理店で漢族が飲酒していることに不快感を示す人も少なくない。他方で、「若いころは飲んでいたが結婚を機に飲まなくなった」「家族に隠れて飲むことがある」と打ち明ける人、「三度の飯より酒が好き」と豪語する人もいる。

飲めと言われると……

中国西北部に位置する新疆ウイグル自治区のオアシス地域では、名産のブドウを使ったワインが製造され、テュルク系ムスリムのウイグル人は、果実酒に葉草を漬け込んだムセレンを愛飲してきた。だが、二〇一〇年代以降、中国政府による宗教統制の一環としてモスクの酒場への改築、ムスリム少数民族の飲酒奨励といった世俗化政策が進められると、当局への反発から飲酒を控える人が増えた。

これらのエピソードから、酒とのつきあい方は、個人のライフステージやそのときの政治・社会的状況によって変わりうる流動的なものなのだということがわかる。なお、多くの場合、女性は男性ほど酒を飲まない。アルコール中毒などの健康被害、飲酒運転による交通事故も深刻な社会問題となっている。かくいう筆者も、クルグズスタン(キルギス)で飲酒運転に巻き込まれ、負傷したことがある。お酒はほどほどに。

(謝辞) 本特集は、2020年度のサントリー文化財団「学問の未来を拓く」採択課題の研究成果の一部である。

酒を詠むムスリム詩人

シエーク・タリク

東京外国語大学 准教授

南アジアの飲酒文化は宗教、地域、社会階層ごとに異なる様相を呈する。人口の約六八パーセントを占めるヒンドゥー教徒は、一部の宗派やカーストを除いて飲酒を忌避する傾向にあるものの、禁止されてはいない。イスラームでは飲酒は原則禁止だが、一六一九世紀に隆盛を誇ったイスラーム王朝

であるムガル帝国の宮廷文化では盛んに飲まれていたようで、詩や音楽、絵画などにその様子が見られる。ウルドゥー語文学では多くのムスリム詩人が飲酒を取り上げた作品を残し、それらは恋愛、神秘主義、人生、社会批判など、さまざまなテーマと結びついている。

禁じられているからこそ、魅力的に感じられたのか、酒と宗教の関係がテーマになる作品も多く見られる。デリーで活躍した詩人のゾウク（一七九〇〜一八五四年）は次のように詠んだ。

信心家よ、酒を飲んだくらいで、なぜ私が不信心者になる？
たった一杯半の水で、信仰が流されたとしても言うのか？

「一杯半の水」と控えめに酒を表現することで、罪を矮小化している様子がうかがえる。宗教には酒の是非を問うよりも、ずっと大事な問題があるということだ。

酒を通じて、信心家を自称する人の本性が炙り出されることもある。ウルドゥー語詩の巨匠ガリーブ（一七九七〜一八六九年）は次のように詠んだ。



ゴアの地元の酒場（インド ゴア、2017年）



若い女性にワインを飲ませるムガル帝国第4代皇帝ジャハーンギールを描いたムガル絵画。画家アブ・アル＝ハサン作、17世紀前半
出典：The Walters Art Museum, W.668, f.40b

ガリーブよ、酒場の戸口と、説教師の居場所、何たる隔たりよ。
されど知るは、昨日我らが出たとき、奴が入ったこと。

酒場にいた自分を棚に上げる、ユーモア溢れる詩である。次のような詩もある。

ガリーブよ、酒は断ったはずなれど、曇り日と月夜には、今もなお嗜む。

こちらもガリーブ特有のユーモアがあるが、わずかに申し訳なきがにじみ出ている。熱帯・亜熱帯気候の南アジアでは「曇り日」と「月夜」が比較的涼しく、飲酒するには好天だと理解するとわかりやすいだろうか。

ウルドゥー語詩では、主人公の失恋に際して酒場（マイハーナ）がよく登場する。ここでは酌人（サーキー）が主人公をさらなる酩酊の境地に誘う。二〇世紀を代表するウルドゥー語詩人のファイズ・アハマド・ファイズ（一九二一〜八四年）の詩を見てみよう。
いくつかの雲が来て、いくらかの酒が来れば
その後はどんな天罰が下っても良い
酒瓶の屋根から月が沈み
酌人の手で陽が出れば良い
血管に再び灯がともり
目の前にあの人が再び覆いのない姿で現れれば良い



上：ボーパール市にある州営酒場。曇り日はビール日和。インドには飲酒禁止の州もある（インド ボーパール、2023年）
下：デーヴァナーガリー文字も書いてあるビールグラス（インド ハイデラバード、2015年）

今日、インド、ネパール、スリランカの都市部ではバーやレストランでさまざまな酒が提供されるが、場所によっては飲酒がご法度だ。パキスタンとバングラデシュでは、イスラーム法の解釈に基づき飲酒が制限されているが、非合法的な飲酒が見られる一方で、許可された場所も存在するなど、実態は多様である。

「正気ではない」の次に「酒場へ行こう」という予想外のオチが特徴的だ。
そして語り尽くした後、そののどかさを共有するわけである。
語るべきことは何もない、全ては語られた。さあ、どこかへ行き酒を飲もう、夜も更けたことだし。
（ニダ・ファーズリー、一九三八〜二〇一六年）

君も僕も、正気ではない。
さあ、酒場へ行こう、そこで語り合おう。
（バシール・バドル、一九三五年〜）

酒瓶が空、酒が太陽と、酒場という宇宙で飲み明かす様子が描写される。
酒場はまた、本音で語り合う場としても描かれる。



ネオンがまばゆい夜のジュファイル地区繁華街の様子（バーレーン、2024年）

もつとも手軽だ。リヤドからおよそ四五〇キロメートル、ほとんどが土漠の景色を横目に車を走らせると海上道路キング・ファハド・コースズウェイが姿をあらわす。そこを通過して国境を越えればバーレーンだ。バーレーンといえば、中東を管轄する米軍の第五艦隊の司令部がある。軍港からほど近いジュファイル地区は、多国籍レストランがひしめく異国情緒とネオン街特有の淫靡さがにまぜになった空間だ。日本の米軍居留地周辺を思い起こさせるこの場所が、ムスリムに非日常を提供する場所にもなっている。サウジアラビアや、同様に酒が禁じられているクウェートのナンバープレートが付けた車が駐車場に並ぶホテルに一度入ると、悪目立ちとは無縁な、仲介者も必要なくムスリムと思わしき人びとが酒を嗜む姿が目に見え込んでくる。バーレーンで一夜を明かしたリヤド市民は、再びコースズウェイを通過して帰国の途に就く。この際、酒を持ち帰ることはできない。めくるめく非日常は一場春夢、ここで終わりというわけだ。彼らは再び酒を飲ま（め）ない、品行方正な日常へと戻る。そしてバーレーンは、今日もまた酒を探し求める別のムスリムで賑わいを見せる。



地方都市の税関で押収され、陳列された酒類（サウジアラビア、2012年）



レバノンでも酒は比較的自由に飲める。ペイルートの雑貨屋の冷蔵庫に詰められた各国のビール（レバノン、2008年）



サウジアラビア側から臨むキング・ファハド・コースズウェイ（サウジアラビア、2012年）

酒はどこにあるのか

悪目立ちはいけない

イスラームの教えがマナーや常識の基礎となるムスリム社会には酒を飲める場所がないと、杓子定規にとらえられがちである。実際には酒を嗜むムスリムもいるし、彼らに酒を提供する飲食店が点在する国が多い。それでも、ムスリム社会で酒を飲むことに一定のハードルがあるのは確かだ。適切な場所、時間、方法を選ばなければありつかなかったりする。ここでは、そんなハードルを乗り越えて酒を探し求めるエピソードをわづかばかり紹介しよう。

そもそもムスリム社会のどこに酒はあるのか。酒を妨げる理由がイスラームだというなら、まずはその文化が薄い場所を探せばよい。キリスト教地区、中華街、海外からの出張者や観光客向けのホテル、レストランなどである。以上はしばしば政府や社会によって酒の提供がやむなしと認められた、一種の治外法権のごとき空間である。

たかお けんいちろう
高尾 賢一郎

中東調査会研究主幹

さりとて、これらの場所がおもな客層と見込むのは非ムスリムであり、地元のムスリムが酒を飲めば悪目立ちとは避けられない。これをクリアするもつとも容易な方法が外国人の接遇である。ゲストをもてなす過程で仕方なくそこに同席し、盃を酌み交わす不可抗力の状況を作り出すというわけだ（筆者自身、ムスリム社会で初めて飲酒したのはこのパターンである）。この場合、外国人がムスリムに飲酒の機会を与える仲介者の役割を果たしている。

コースズウェイを渡れば

しかし、そもそも合法的な飲酒が不可能な国もある。この場合は越境しかない。筆者が滞在したサウジアラビアの首都リヤドの例を挙げよう。同国では酒の流通が原則禁止され、「宗教警察」（勸善懲惡委員会）を筆頭に治安機関が酒の密輸や密造を取り締まっている。それでも酒を求めるなら、隣国の島国バーレーンに陸路で向かうのが

英雄叙事詩にあらわれる「酒」

中央ユーラシアでは多くの英雄叙事詩がイスラーム化以前から口伝えで語られ、長く人びとに愛されてきた。酒文化とは縁遠いと思われるかもしれない英雄叙事詩にも酒や酔っ払いがあらわれる。



英雄叙事詩『アルパマス＝パトゥル』の主人公アルパマスの像。アルパマスの「故郷」バイスンに建立されていた(ウズベキスタン バイスン、2003年)

坂井 弘紀

和光大学 教授

カザフに伝わる英雄叙事詩『アルパマス＝パトゥル』の主人公アルパマスは、老夫婦が「創造の主、唯一神の方角に向かい」祈願した結果、誕生する。その祝宴では「アラク（蒸留酒）にワインに蜜酒が注がれ、飲むものみな（盃を）傾けた」と、宴では多種の酒が飲まれたことがうたわれる。成長したアルパマスは格闘に長け、駿馬を操り、強弓を引き、勇者としてののずば抜けた能力を示すが、あるとき敵の罠に落ちてしまう。敵の老婆が「お水をお飲み」とだまして酒を飲ませるのである。勇者は白い絨毯に座らされ、四〇人の美女が順番に跪いてお酌をする。若い勇者は四〇杯の盃を空けて、すっかり酔っぱらった。酒を飲み干したアルパマスは、天幕の外に出て青い平原で吐くと倒れてしまった。その様は「嵐のような大声でたくさんの悪魔が笑い合った」と描かれる。地下牢につながれた勇者は「長い長い眠りの後に、酒の悲しみが戻っ

てきた」。深酒の後、誰もが経験する「悲しみ」である。深く後悔するうちに、唯一神の存在を思い出す。神や聖者らに祈りを捧げ、正気を取り戻し、地下牢から脱すると、やがて勇者は敵を打ち破った。まるで勇者らしからぬ失態と醜態であるが、そこには超人的な勇者の人間くさい一面と酒と人間との普遍的な悲しい関係が映し出されているのである。



上：中央アジア遊牧民の伝統的な移動式住居ユルタ（クルグズスタン[キルギス]、2016年）
左：日本にてユルタを建て、ナウルズ（春祭り）を祝う宴の様子。酒も並んでいる（東京都、2019年）



イランにおける「非合法的な」愉しみ

小澤 一郎

立命館大学 教授

イランでは、一九七九年の革命でシーア派イスラームに基づく政治体制が成立して以降、イスラームの教義解釈に基づきアルコール飲料の製造・販売・飲用・保持が法的に全面禁止されている。この規定は外国人にも適用されるため、他国のように外国人用の施設で飲むこともできない。このため、イランでの飲酒は必然的に非合法的な手段を伴うことになる。

イランの人びとが酒を楽しむもつとも一般的な方法は、国内で密造された酒を飲むものである。イランでは、ブドウやザクロから作られるワインのような醸造酒や、アラクとよばれる蒸留酒が非合法に流通しており、人びとは知り合いを通じたルートでそれらを



マーヒーチェ
ヒツジのすね肉の煮込み。トマト仕立てでワイン類によく合う

法が禁止しても、非合法的手段に訴えて飲酒を愉しむイランの人びとの姿を見ていると、人間にとって酒とは、という問題について、考えさせられるところが多い。

(写真はすべて大阪府内のイラン料理店にて2025年撮影)

イスタンブール、 「酒飲む隣人」の置土産

みやした りょう
宮下 遼

大阪大学 准教授

イスタンブールの居酒屋文化はイスラームの文化風土で語り尽せない部分を残す。つい一〇〇年前まで、その担い手がギリシア系、アルメニア系などの非ムスリムであったからだ。筆者が都市史の文脈で「酒飲む隣人」と称してきた彼らの痕跡をよく留めるのが居酒屋である。まずもつてこの街では居酒屋（meyhane）の看板を掲げる店は少なく、多くは魚料理屋（balık lokantası）を名乗るのが常で、これはオスマン帝国期に酒造業・居酒屋業と並び漁業がギリシア系同職組合に独占されていた縁による。当然、供される酒肴（shikō）にも、トルコ系が持ち込んだ乳製品を用いたディップ類やスイカ、メロンなどの果物と、魚介類の揚げ物や酢漬け、焼いた物といった地中海世界で先住者である「酒飲む隣人」のあてが同居する。そのなかにはムスリムが好んで



酒とともに多彩なメゼが並ぶ（トルコ アンカラ、2023年、海野典子撮影）

食さないタコなどの頭足類も多く含まれるが、現地食を許容するシャーフイー学派の見解が広く知られているからなのか、この街ではよく食べられる。

トルコではイスラーム系保守政党である公正発展党政権が四半世紀を闊（ひら）くとしていた。酒類の販売価格引き上げ、広告掲載の禁止などにより酒造業は困難な時期を迎



上：トルコの居酒屋では、ショーケース内に獲れたての生魚が並び、選んだ魚を調理してもらうことができる
左：トルコの居酒屋の店内。多くは魚料理屋を名乗る（どちらもトルコ イスタンブール、2009年）

え、庶民のあいだでは密造・密輸酒が蔓延（まんえん）するなど、従来は酒に寛容とされてきたトルコ社会の飲酒文化・産業はいま岐路に立つ。ハラームの象徴たる酒は、ともすればその飲用を巡って鋭い対立を生むが、願わくばその余殃（よおう）が「酒飲む隣人」の記憶を伝える食文化にまで及んでほしくない。

インドネシアの 「おしゃれな」カフェバー

にしかわ けい
西川 慧

石巻専修大学 准教授

酒場には、それぞれの街における酒に対するイメージが投影されている。ムスリムが大多数を占めるインドネシア西スマトラ州の場合、酒を飲むといえば、その横には若い女性がいて、ともに大音量の音楽で踊ることができ、お金を出せばホテルまで……ということが想起される。ムスリムにとっては罪のオンパレードである。それゆえ、酒場の多くは外からは中が見えない構造になっており、怪しげな雰囲気をもしだす。こうした店の多くは、非ムスリムが多く暮らす中華街に集中している。

一方で、近年は中華街の古い建物を改修した「おしゃれな」カフェバーが少しずつ増えてきた。この地域は、サーフィンの名所へ向かう高速ボートの発着場でもあり、多くの外国人観光客が訪れる。新しいカフェバーは、レトロな街並みを活かしなが



かつてはサトウヤシの樹液を自然発酵させた伝統酒が飲まれていた（インドネシア バトゥサンカル、2014年）

らも、大胆なリノベーションによって観光客を惹（ひ）きつけている。そして、そこには酒を求めるムスリムたちの姿もある。

こうしたカフェバーでは、ピザやハンバーガーといった西洋料理が提供され、酒はアルコール度数の低いビールのみ。客層の中心は、「酒は飲みたいが、騒ぎすぎるのは避けたい」という若い男性たちだ。敬虔（けいけん）なムスリムであるわたしの友人も、「ここなら行ってみよう」と興味を示し、社会見学のつもりでついてきてくれた。従来の酒場のような性的な雰囲気ではなく、洗練されたイメージを演出することで、酒場に対する後ろめたさをやわらげる工夫がなされているのだ。



中華街に古くからあった倉庫を改装したカフェバー（インドネシア バダン、2020年）



内装には廃材が使われ、アヴァンギャルドな雰囲気（インドネシア バダン、2020年）

照屋林助のどこでもボックスⅡ

地域 | 沖縄県 沖縄市
展示場 | 東アジア 日本の文化
所蔵 | 照屋林次郎氏

★ 推しコレポイント ★

晩年、病気で動かなくなった林助の指でも調節ができるように、ボリュームのつまみに棒が付けてある！
どこでもひとりでもライブが可能なのだ。



照屋林助のどこでもボックスⅡ
地域：沖縄県 沖縄市 年代：2005年ごろまで使用
照屋林次郎氏 所蔵
Rinsuke Teruya's Everywhere Box2
Place: Okinawa, Okinawa Date: Used until around 2005
Collection: Rinsuke Teruya



いつでもどこでも「ワタブーショウ」

ごや じゅんこ 照屋 淳子 沖縄県立芸術大学 准教授

「チャンプラリズム」とは

今年^{てん やりんすけ}は照屋林助の没後20年である。照屋林助は、漫談家、作詞作曲家、役者など、いくつもの肩書をもっている。コザ独立国大統領と名乗り、「チャンプラリズム」を実践した。「チャンプラリズム」とは、林助の造語である。「はるか海の彼方から流れついた寄りものを、神の恵と拾いあげて、そのなかから自分たちの都合のよいものをどんどん取り入れるということ。どんどんどんどん混ぜこぜにしていると、だんだん何と何が混ざっているのかわからなくなる。文化をごたまぜにして楽しむ遊びの文化」と、林助は語る。異なるところばかりに目をやり、それを細かく分け、敵味方に区別することで争いが生じる。でも、だいたい似通ったもの、同じようなものを「文化的な兄弟」としてとらえることができれば、世界は平和になる。彼は、世界の中心はひとつではないことに気づかせてくれる。わたしはこうした林助の世界観が大好きなのである。

林助は神様も喜ばせる

照屋林助は1929年、大阪市此花区四貫島で生まれ、1936年に両親とともに沖縄に帰って来た。戦後は小那覇舞天と一緒に、荒廃した沖縄で悲しむ人びとを歌と笑いで励ました。1958年、漫談師の前川守康^{まえかわしゅこう}とコンビを組んで「ワタブーショウ」とよばれるウチナーンチュ向けの歌謡漫談を始めた。ワタブーショウ

ウにおいて、林助は沖縄歌劇をパロディにして、ルンバやマンボ、チャチャチャなどラテン音楽の要素を取り入れた沖縄ポップスと寸劇による斬新な舞台を披露した。

今回、わたしが推しコレとして紹介する「どこでもボックスⅡ」は、いつでもどこでもひとりでワタブーショウができるようにと林助の発案で家族が制作したものである。改良した旅行鞆^{かばん}のなかには、ミニディスク、スピーカーやアンプ、譜面台やポータブル電源など必要な機材が入っている。そして、コンピューターで作った演奏と林助自作の「電気四味線」を弾きながら、歌って語る。そして、みんなで笑うのである。林助は、笑いは人間だけでなく、神様も喜ばせるという。その活動は、1950年代後半から2005年までの約50年間、途切れることなく続いた。照屋林助の歌謡漫談は、沖縄文化の発現であり、機知に満ちた遊びである。



林助の「ワタブーショウ」の一部を録音したCDや書籍もぜひ手にとっていただきたい(沖縄県 沖縄市、2025年)

追悼

菅瀬晶子准教授を偲ぶ

二〇二五年三月三十一日ご逝去

潔い人だった。正義感が強く、曲がったことが嫌い。気つ風の良い江戸っ子とでも言おうか。菅瀬晶子准教授は、東京都生まれ。東京外国語大学で学部・大学院修士課程までアラビア語および中東研究を専攻した後、総合研究大学院大学の地域文化学専攻博士後期課程、つまり民博の大学院に進学した。わたしが彼女と出会ったのは、一九九九年、この大学院（民博）でのことだった。

当時から彼女は、イスラエルに暮らすアラブ人キリスト教徒に研究の焦点を当てていた。モンゴル研究のわたしからすると、イスラエルなのにアラブ人？ アラブ人なのにカトリック信徒？ と謎すぎる研究テーマだった。また、彼女が熱く語っていたのは、「マール・ジュリエス」すなわち、旧約聖書に登場する竜退治の聖人、聖ゲオルギウスが、豊穡の聖者としてキリスト教徒のみならず、ムスリムにも崇敬を集めているという話だった。おそらく、とかく宗教対立ばかり報道されるパレスチナの地において、彼女はアラブ人キリスト教徒や聖者崇敬のあり方



菅瀬晶子准教授（写真左）。みんぱく「イスラム教とアラブ世界のくらし」（2012年改訂版）のプロフィール写真から

に宗教融和の可能性を見出だしていたのだろう。菅瀬さんは料理上手としても、われわれ大学院生仲間で有名だった。彼女が作ってくれたひよこ豆料理やパウンドケーキの味を忘れられないのは、わたしだけではあるまい。今、思い起こすと、彼女の作った中東料理の多くは、彼女がハイファでお世話になったウナム・アーザルに教わったものだったのだろう。

七年ほど前から闘病生活に。昨年末、余命宣告をされたと本人に聞き、慌てて大学院の仲間と「菅瀬さんを囲む会」を開いた。菅瀬さんはほつそりとしていたが、驚くほど笑顔でケラケラ笑いながら中東料理に舌鼓を打っていた。ひよつとして余命宣告なんて、悪い冗談じゃないか、と思つたくらいだった。その一方、締めあいさつで彼女はきつぱりと言った。「わたしは桜を見ることはないでしょう。これがわたしの人生。でも未練はありません」と。そのことばどおり、桜を見ることなく亡くなった。最後まで「男前な」菅瀬さんだった。盟友、菅瀬晶子さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

しまむら いづい
島村 一平 民博教授

失われた故郷へと運ぶバス

ヒョソラン
片雪蘭

奈良大学講師

喧騒^{けんそう}に包まれたデリーの北部、その一角にあるマジュヌカティラ。この小さな地区から、毎晩、一五台ほどの夜行バスが出発する。夕方になると、人びとが集まり、バスに荷物を積み込む音や低く響くエンジン音、出発を知らせる運転手の声が交じり合う。バスの周りには、スーツケースやカバンを手にし、今か今かと出発を待つ人びとが集まっている。

彼らはチベット難民である。インド各地に、約一〇万人のチベット難民が住んでいる。なかでも、チベット仏教の精神的指導者ダライ・ラマの亡命先であるダラムサラは、重要な位置を占めている。この地を訪れるために、チベット人は夜毎にバスに乗り込む。

デリーからダラムサラへの道のりには、三つの選択肢がある。飛行機、列車、そしてバスだ。飛行機は高価で、空港からはタク

シーを頼らねばならない。列車でも最寄駅から遠く、辿り着くまで時間がかかる。そこで、チベット難民は自らの手で解決策を生み出した。デリーのチベット難民居住地マジュヌカティラとダラムサラのチベット難民居住地マクロード・ガンジを結ぶ、彼ら自身のバス路線である。

特に観光シーズンやダライ・ラマの説法がおこなわれる時期は、いつも満席になる。一二時間にもおよぶ長い道のり、夜を徹してくねくねとした山道を進む夜行バスの旅は、決して楽ではない。

それでも、バスのなかでは明るいチベット語の声が飛び交う。故郷の音楽や食べ物といった楽しみもある。ついに標高二〇〇〇メートルを超えるマクロード・ガンジに到着すると、朝の涼しい山頂の空気が、旅の疲れを癒してくれる。彼らはダライ・ラマ寺院に足を運び、祈りを捧げ

る。その時間は、彼らにとって安らぎのひとつなのである。

ダライ・ラマが住まうダラムサラは、チベット人にとって心の故郷であり、聖地に他ならない。デリーとダラムサラをつなぐバスは、単なる移動手段ではない。ダライ・ラマへの敬愛を乗せ、失われた故郷への追憶を今日も運び続けている。ダライ・ラマが九〇歳の誕生日を迎える今年も、彼らの旅は変わらず続いていくだろう。



上：ダライ・ラマに捧げる祈りとチベット新年「ロサル」の祭壇
下：マジュヌカティラ発、ダラムサラ行きの夜行バス
(写真はどちらもインド デリー、2025年)

だって
調査だもの

アームチエアー言語学者、萌ゆ

ながい まさかつ
永井 正勝
筑波大学 教授



読解が難しい文字にこそ

「みんないいな」というのがこのコーナーを読むたびに思う正直な感想だった。何が「いい」のかというと、



ルクソール神殿に組まれた足場。この足場の裏にあるレリーフを撮影しに来たのに、叶わなかった(エジプト ルクソール、2005年)

筆者の方々が現地での素晴らしい武勇伝をお持ちだということ。自身の研究室でモニターに映った資料の画像を見ながら、古代エジプト文字を読解しているわたしのようなアームチエアー言語学者にとって、フィールドネタなんて、それほどあるわけではない。そんなわたしにとって、ささやかな萌えは研究室で起こる。文字資料の研究では、翻字(翻刻)といって、研究者によって解釈されたテキストが使用されることがある。研究の初期の段階では、入手が容易な翻字を使うこともある。しかし、翻字を読んでいると、どうしても現物が気になる。そこでまずは写真を入力して確認するが、現物が下手な文字で書かれていると、読解に苦勞する。しかし、文献言語学者

としては、読解が難しい文字にこそ、萌え上がる。
この萌えを鎮めるには、現物を見なければならぬ。かくして、海外の博物館や遺跡に行くこととなる。
「またか」のルクソール

ある年、エジプトのルクソールにあるカルナク神殿に向かった。シェシオンク一世がパレスチナ地方に遠征した際のレリーフを見るためだ。早朝、調査初日の高揚感のもと、心を弾ませながら遺跡に向かった。ところが、調査対象となる壁面に到着したとたん、思わず声が出る。「またか」と。
壁の前にクレーン車が停まっている、壁面のレリーフを隠していたのだ。「なんでこんなところにクレー



カルナク神殿に停まっていたクレーン車(エジプト ルクソール、2020年)



朝食後、ホテルの屋上で研究書を広げ、遺跡のレリーフの予習をおこなう(エジプト ルクソール、2005年)

ン車が停まっているんだ」と、やるせない気持ちになる。じつは、その一五年前、まだ院生だったころ、ルクソール神殿に行ってみると、壁の前に足場が組まれていて調査ができないことがあった。そのような体験もあったので、思わず「またか」となったのだ。
またあるとき、ラメセス三世葬祭神殿でレリーフの写真を撮影していると、目の前を黄色いフォークリフトが横切った。よく見ると、その車体には、漢字で日本の会社名が記されている。「日本の企業はエジプト

の遺跡で修復にも貢献してるんだな」と勝手に感心した。
その後、帰国してからその会社の所在を調べて問い合わせしてみたところ、事情は異なっていた。社長さんが言うには、その重機は以前に下取りに出したものだという。なんと、日本で引き取られた中古重機がエジプトまで辿り着き、修復の第一線で利用されていたのだ。中古市場のルートは、なんともワールドワイド。
モヤモヤあればこそ

身も蓋も無いようだが、現地で現物を見ても、わからないものはわからなかったりする。そのとき、萌えがモヤモヤに変わる。その一方、現物を見ると、文字よりも挿絵の方が先に表記されていたなど、想定外の発見を得ることもある。そんなモヤモヤや発見をたずさえて再び研究室に戻り、あらたな知見を模索して資料と格闘する。すると、いつしかまた萌え上がる。今回は無事に撮影できますように。

ラメセス3世葬祭神殿で目の前を横切ったフォークリフト。漢字で会社名が書かれているが、写真ではぼかしている(エジプト ルクソール、2023年)





甘い香りに包まれたチナブ

ますだ きわこ
益田 喜和子

慶應義塾大学大学院 博士後期課程

「これじゃあ、だめ。細すぎる」

「これは短すぎるね」

早朝から、チナブの包みにちょうどよい月桃(ショウガ科の常緑多年草)の葉を探すのに苦労していた。「これでいいかな」と何度も確かめるうちに、十分な長さとおさをもった月桃の葉を見分けられるようになっていく。この日は「お客さんが来るから」と言われ、わたしひとりで30本ものチナブを包むことになっていた。

チナブは、台湾の「原住民族」のひとつ、パイワンの食べ物である。作り方や具材は集落ごとにさまざまだが、一般的に水に一晩つけたアワもしくはもちめしに、塩をまぶした豚肉あるいは魚、芋類などを餡として加え、ルリホオズキの葉と月桃の葉で包み、ひもで括って1時間ほど蒸せば完成だ。外側の月桃の葉だけを剥がして、消化を助けるという内側のルリホオズキの葉は、そのまま具材と一緒に食べる。特に、パイワンの人びとにとって神聖な作物であるアワを用いたチナブは、アワ収穫祭

や婚礼などでも用意される食べ物のひとつである。

「都市原住民」に関する調査をしていたわたしは、台中市に暮らすアーリンリンさんにお世話になっていた。彼女は、わざわざ故郷の集落からチナブで使う月桃やルリホオズキを持ってきて、台中市の自宅の敷地に植えていた。宴会やカラオケのために訪れる大人数の客をもてなすために、チナブはかならず多めに作る。わたしはアーリンリンさんとの日常のなかで、何度もチナブを包み、食べた。持ち歩きに便利で、ひとつ食べればすぐにお腹が膨れ、元気も出るチナブは、ゆっくりと座って食べる時間がないとき、車での移動中、小腹が空いたときなど、「フィルめし」としても重宝する。

都市よりも集落の方が、月桃の甘い香りが豊かだと言う人もいた。実際に、旧正月や中秋節などの連休期間にお世話になった台東県の土坂集落で見た月桃の葉は、どっしりと太くて長かった。ルリホオズキの葉も、台中の葉よりひと回りもふた回りも大きい。そのとき、友人のお母さんが作ってくれたチナブは、先に月桃の葉を下茹でしてから具材を包んだり、蒸す際に鍋底に月桃の葉を敷いたり、アーリンリンさんの作り方とは少し異なっていた。

葉の大きさや手順の違いは、月桃の香り方や味付けにも影響する。アーリンリンさんが作ってくれる濃い味付けのチナブも好きだし、土坂集落でいただいた、どっしりとした貫禄のある、シンプルな味付けのチナブもまた美味しい。



筆者が大量にチナブを包んだ日。アワを使用
(台湾 台中市、2022年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

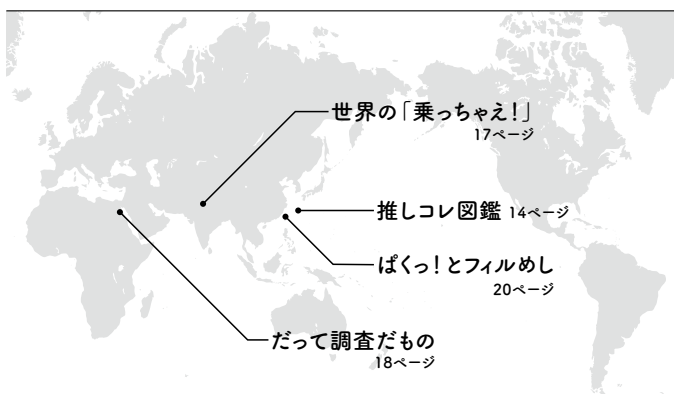
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

素潜り旬さんの「巻頭エッセイ」に、いきなりのカウンターパンチ! どこからどう読めばいいのか面食らった。数字を頼りに、詩のことばを追った。あとで素潜り旬さんからの説明を又聞きして納得。みんぱくの特別展を見に来た人たちの視線の動きをイメージしたのだそう。ときには他人ごしに展示物を見る人の視線はじっと定まりにくい。だからタイトルも「視線とフェイスズ」。そういえば本誌巻頭に詩人が登場したことはあるが、詩の寄稿ははじめてである。

今月号は「もっと、みんぱく」コーナーはお休みし、3月31日に亡くなった菅瀬晶子さんの追悼記事を、大学院

生時代から仲良しだった島村一平さん

にお願いした。かつて編集委員でも

あった彼女は本誌にかなりの本数を

寄稿してくださっている。奇しくも3

月号掲載「推しコレ図鑑」が彼女の

絶筆かも。本当にありがとうございました。

ご冥福を心よりお祈り

いたします。(樫永真佐夫)



次号の予告 7月号

特集「氷」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

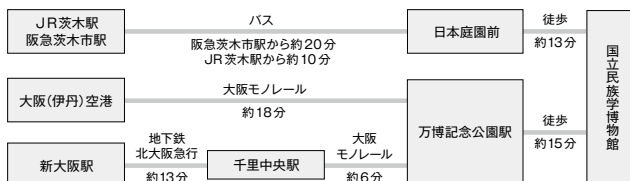
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 ▼2025年6月17日(火)まで
一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
▼2025年6月19日(木)から
一般 780円/大学生 340円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





国立民族学博物館五十年史編集委員会
編集・発行：国立民族学博物館
判型：A5判
頁数：巻頭カラーグラビア 8頁 本文 422頁

定価 **3,960円** (税込)

国立民族学博物館創設50周年記念史

『語りあい ひらける世界 みんなく五十年の歩み』

第1章 みんなくを語る

創設50周年記念史のためにおこなわれた3つの特別対談を収録。

浅川智恵子(日本科学未来館館長)／井浦新(俳優)／森薫(漫画家)

第2章 時代とともに歩む

『月刊みんなく』創刊からつづく巻頭エッセイより16名のエッセイを再掲。

第3章 歴代館長からのメッセージ

歴代館長の講演やインタビュー、エッセイなどでみんなくの歴史をたどる。

第4章 未来へのまなざし

黒川紀章や岡本太郎など時代を彩る方々の館長対談やインタビュー12本を再録。

そのときどきの時代を読む試みは、現代社会にも通じ、未来への提言となりうる。

第5章 人類と文明を考える

研究部スタッフが最新の人類学的・文明論的なテーマで語りあう4つの対談を収録。

オリジナルグッズの
新定番!



フローティングボールペン

ペンを傾けると現地調査員が動きます。
コレクションアイテムとしても人気です。
インク：黒、ウォータブルーフ

定価 **各1,240円** (税込)

表紙のイラストは
2種類あるよ!



測量野帳

みんなくフィールド・ノート

みんなくの研究者たちが永年愛用してきた測量野帳(コクヨ)の表紙に、みんなくロゴとイラストレーターの岡島礼子さんのオリジナルイラストを刻印しました。
サイズ：165mm×95mm

定価 **500円** (税込)

(マイルポスト)

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
(国立民族学博物館1階、10:00~17:00、水曜日定休)

オンラインショップ「World Wide Bazaar」
<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

